

表現活動に必要な知識・技能に関する考察

— 学生時代に習得すべきと考える内容 —

中 村 三 緒 子

（2017年10月14日受理）

要 旨

保育現場では多様な表現活動が行われ、先行研究では保育者に求められる知識・技能として、音楽表現では弾き歌い、造形表現では自然・色・形・感触・イメージ等に親しむ体験、身体表現では身体活動を伴った遊びの体験があげられてきた。養成校学生に行った調査結果によると幼稚園の責任実習を通して、大学で学んだ方がよい内容は「指導法」や「感性」であり、大学で経験・習得しておくことよい事柄は「人前で話す経験」、「みんなの前で指導する経験」、「子どもたちへの伝え方、まとめ方」、「考える力」などであった。

多くの子どもを前にこれまでに大学で学んできた内容・能力を発揮することが難しいことも考えられる。保育者養成校では感性豊かな保育者を育てるための工夫が必要であり、表現活動に関する授業の情報交換を教員相互に行いながら、保育現場で必要とされる授業を考察していく必要がある。

キーワード 表現活動、養成校で身につけておくべき音楽技能・知識、
大学で習得しておくべき内容

1. はじめに

1989（平成元）年に幼稚園教育要領が改訂され、保育内容6領域「健康・社会・自然・言語・音楽リズム・絵画製作」が5領域「健康・人間関係・環境・言葉・表現」となり、その後1998（平成10）年、2008（平成20）年と2回改訂された。20年以上経過しても保育者はどのように幼児の音楽的表現を引き出したらよいか手探り状態である⁽¹⁾。また、幼稚園教育要領「表現」を音楽的側面に焦点をあてて読み取ると、子どもの心身の発達を考慮し、子ども自身の表現の内容や手段をくみ取り、意味づけていくことの必要性が示される。しかし、保育の現場では、表現の「ねらい」を具体的な「内容」として幼児の活動に導く力に欠けている。また、領域「表現」については、表現を指導する養成機関が十分に役割を果たしていないという⁽²⁾。

「表現」に関する議論には、音楽リズムから表現に関する歴史的な変遷⁽³⁾や保育者養成校での音楽、身体表現などに関する教育のあり方、養成校における「表現」授業の実施状況などか明らかにされてきた。先行研究では音楽表現に関する研究が多く、保育者養成校における「保育内容表現」状況を概観し、実践的な展開がなされていること⁽⁴⁾、8短期大学⁽⁵⁾における基礎技能、表現に係る科目の関係から音楽科目内容の比重が多いことなども指摘された。埼玉県と東京都の幼稚園教諭と小学校教諭を対象に必要とされる音楽技能・能力・知識などに関するアンケートでは、教師が直面し、必要としているものは「ピアノ等を使った演奏や援助の方法」、「子どもと歌って遊ぶ方法」など、教師自身に内在する音楽的指導力を基盤にとらえていることも示された⁽⁶⁾。

先行研究では保育現場で保育者が行っている表現内容と保育者養成校に求める表現内容が示されてきたことから、本研究では保育者養成に必要と考えられる表現内容を先行研究から整理した後、筆者の教職実践演習に出席した学生に幼稚園実習を振り返ってもらった結果を参考に、保育者養成校に必要と考えられる表現内容について検討したい。

図表 1. 幼稚園教諭の専門的職業能力として重視しているもの
— 個別的・具体的保育知識・実践力

	平均値
① 子どもの個別性に対応する力	4.1
② 子どもの体調や気持ちの変化に応じて対応を変える力	4.1
③ 子どもを見守り支援する力	4.1
④ 豊かな表現力	4.3
⑤ 運動能力	4.0
⑥ 運動遊びを展開する力	4.1
⑦ ピアノ技術	4.4
⑧ 音楽遊びや伝承遊びを展開する力	4.1
⑨ 言語能力（特に話し言葉での能力）	4.0
⑩ 子どもへの話しかけや説明を適切にする力	4.0
⑪ 動植物への興味や知識の豊富さ	3.8
⑫ 自然と触れ合う喜びを伝える力	3.9
⑬ 絵画造形能力	4.2
⑭ 制作指導を適切にする力	4.1
⑮ 食育への興味や知識の豊富さ	3.8
⑯ 食育指導を適切にする力	3.7
⑰ 保健衛生や安全についての知識	3.8
⑱ 保健衛生や安全についての指導を適切にする力	3.8
⑲ 公共性や社会についての意識	3.7
⑳ 季節の移り変わりに関する敏感さ、自然の風物に関する興味関心	3.8

出所：調査票 E 専門的職業能力（幼稚園教諭）に関する調査結果
「幼稚園教諭の専門的職業能力として重視しているもの」より一部転載81-82頁。

2. 保育者に求められる表現内容に関する能力

1) 日本私立短期大学協会加盟校と幼稚園を対象にした調査⁽⁷⁾

幼稚園教諭養成に必要な能力について、養成校である短期大学と就職先の幼稚園双方に質問紙調査と訪問調査を実施後に共通して重視する能力が抽出された。そのうち、短期大学調査から個別・具体的保育知識・実践力について5段階（5を「非常に重視」）で質問した20項目のうち、平均値が高い内容は「ピアノ技術（4.4）」、「豊かな表現力（4.3）」「絵画造形能力（4.2）」、「子どもの個別性に対応する力（4.1）」「子どもの体調や気持ちの変化に応じて対応を変える力（4.1）」「子どもを守り支援する力（4.1）」「運動遊びを展開する力（4.1）」「音楽遊びや伝承遊びを展開する力（4.1）」「制作指導を適切にする力（4.1）」であった。幼稚園教諭に必要な専門的職業能力として、運動やリズム表現、造形表現、音楽表現を子どもに指導する基本的な考え方を理解し、基礎となる技法を身につけること、子どもの歌が歌えるレベルのピアノ技術の習得、動植物の生態に関する知識を持ち、動植物を適切に育てることができること、季節に応じた日本の行事を知り、その意味を説明できるが示された。

2) 短大の卒業生を対象にした現役保育者への意識調査⁽⁸⁾

現役保育者が、必要と考える造形能力は1位「活動を支える能力」、2位「絵を描く能力」、3位「工作をする能力」であった。「工作は大丈夫だけど、お絵かき指導についてはわからない。」という声が多く、現役保育者の学び直しや、幼稚園教諭更新講習、保育者研修の機会などで最も多い相談は、「子どものお絵かきについて」の指導方法や、描かない子への対応、描き方について教えていいのかどうかわからないという悩みをもつ保育者が多いという結果が明らかになった。

図表2. 日常の保育で実施している表現活動（複数回答）（人）

表現活動の種類	件数
絵画製作	67
歌唱	65
手遊び	62
運動遊び	62
劇遊び	60
工作	58
リズム遊び	58
粘土	53
合奏	52
ダンス	48
模倣遊び	40

3) 京都府南部の幼稚園・保育所を対象にした調査⁽⁹⁾

京都府南部の幼稚園・保育所69園（内訳は幼稚園33園（公立10園・私立23園）、保育所35園（公立14園・私立21園）、認定こども園1園（公立））の5歳児クラス担任（20代17名、30代30名、40代7名、50代11名、60代4名）を対象にした調査結果によると、日常の保育で実施している表現活動は、絵画製作（67園）、歌唱（65園）、手遊び（62園）、運動遊び（62園）、劇遊び（60園）、工作（58園）、リズム遊び（58園）、粘土（53園）、合奏（52園）、ダンス（48園）、模倣遊び（40園）などであった（図表2）。保育現場では音楽・身体・言葉表現の活動は関連さ

出所：智原他「幼稚園・保育所における表現領域の活動に対応した保育者養成の脅威のあり方」120頁。
「表3. 日常の保育の中での表現活動について」を転載。 n = 69

せて実施され多様な表現活動が行われることが多く、造形表現は単独で実施されていることが多い。

表現領域において保育者に求められる能力として「非常に重要」「重要」合計回答が多かったのは、「保育のねらいに則し、子どもの遊びを豊かに『展開するための技術』の習得」（65名）、「表現活動の観点から『子どもの発達をとらえ、具体的な表現活動に結びつけることのできる能力』」（65名）である（図表3）。

図表3. 表現活動を指導する保育者の資質として重要な事柄に関する重要度 (人)

表現活動を指導する保育者の 資質として重要な事柄	重要 でない	あまり 重要でない	どちらでも ない	重要	非常に 重要
身体・音楽・造形・言語等の表現活動に関する豊かな『感性』	1	0	3	24	40
身体・音楽・造形・言語等の表現活動に関する技能	1	1	7	44	16
身体・音楽・造形・言語等の表現活動にかかわる教材などを子どもの発達に合わせて作成・活用する能力	1	1	4	30	32
身体・音楽・造形・言語等の表現活動の指導法の習得	1	1	8	35	24
保育のねらいに則し、子どもの遊びを豊かに『展開するための技術』の習得	1	1	2	31	34
表現活動の観点から『子どもの発達をとらえ、具体的な表現活動に結びつけることのできる能力』	1	1	2	27	38

出所：智原他「幼稚園・保育所における表現領域の活動に対応した保育者養成の脅威のあり方」123頁より転載、一部筆者加筆。 n = 69

表現活動に必要な専門性として保育者養成学生が習得しておくことが望ましい知識・技能には「表現活動に関する豊かな『感性』」（41名）、「表現活動にかかわる教材などを子どもの発達に合わせて作成・活用する能力」（35名）である（図表4）。すなわち、保育者の資質として重要とあげられた、感性・子ども理解（発達）・領域の総合性理解が求められた。表現活動を実践するために養成校在学中に経験しておくことが望ましい事柄は、感性を磨いて個々の教材につながるような活動の経験と現場経験の重要性が指摘された（図表5）。

次頁の調査結果をもとに、養成校（全国の養成校のうち55校⁽¹⁰⁾）で実施されている表現領域科目を調査した結果によると、総合的な表現活動に関心のある養成校の表現領域科目担当者が少ないこと、複数の領域を重複した表現活動とくに音楽表現と重複した活動が多かった。また、表現領域を担当する養成校教員は保育者の資質として、「感性」を重要と考えるものの、学生に習得してほしいと考えるのは「教材を作成・活用する能力」であった。

図表 4. 表現活動を指導するうえで保育者養成学生が
習得しておくことが望ましい知識・技能（複数回答） (人)

学生が習得しておくべき知識・技能	件数
身体・音楽・造形・言語等の表現活動に関する豊かな『感性』	41
身体・音楽・造形・言語等の表現活動に関する技能	28
身体・音楽・造形・言語等の表現活動にかかわる教材などを 子どもの発達に合わせて作成・活用する能力	35
身体・音楽・造形・言語等の表現活動の指導法の習得	29
保育のねらいに則し、子どもの遊びを豊かに『展開するための 技術』の習得	25
表現活動の観点から『子どもの発達をとらえ、具体的な表現 活動に結びつけることのできる能力』	23
その他	10

出所：智原他「幼稚園・保育所における表現領域の活動に対応した保育者養成の脅威のあり方」128頁より転載。一部筆者加筆。 n = 69

図表 5. 表現活動を実践するために養成校在学中に経験しておくことが望ましい事柄（自由記入）

養成校在学中に経験しておくことが望ましい指導内容と指導方法	
指導 内容	<p>〈感性を磨いて個々の教材につながるような活動経験〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子ども役、保育者役になりきる ・いろいろなものを見て感じる（本物の観劇や鑑賞） ・描画の技法、画材の使用法、ピアノの初見演奏技術、編曲・転調・コード、絵本、手遊びの習得 ・絵本や紙芝居の作成、創作ダンス（グループ製作、ミュージカル）、リトミック、パネルシアターの経験 ・自然と出会う ・創作（シナリオ製作から演じるまで）、共同制作、劇遊びや歌唱の指導法など
	<p>〈現場経験が重要な事柄〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもと活動する（できれば週1回程度の頻度授業として）、子どもありきの表現 ・さまざまな園行事（発表会など）に参加 ・実習での設定保育
指導 方法	<ul style="list-style-type: none"> ・観劇、鑑賞、自然とのふれあいを通して感性を磨く ・物事を受けとめる感性や感受性、心を動かす経験や感情の豊かさを身に付ける ・相手の表現に興味を持ち、受け入れる ・自分自身を表現する能力 ・社会人としての社会性、コミュニケーション能力 ・子どもの目線で遊ぶ

出所：智原他「幼稚園・保育所における表現領域の活動に対応した保育者養成の脅威のあり方」128頁より転載、一部筆者加筆。

5

4）埼玉県・東京都の公・私立幼稚園に在職する教員を対象にした調査⁽¹¹⁾

埼玉県・東京都の公・私立幼稚園の教員（計134名）を対象に行われた、「領域「表現」指導に必要と感じる音楽に関わる技能や知識に関するアンケート調査」⁽¹²⁾によると、「幼稚園教諭として現在必要と考えられる音楽に関する技能・知識」について、「必要」と「やや必要」

を合わせた結果は、「手遊びやその指導方法」（93%）、「子どもが歌うための援助方法」（91%）、「弾き歌いの技能」（91%）、「ピアノの伴奏方法」（89%）、「教師の音楽活動での動き、表情のあり方」（88%）である（図表6-1）。一方、「必要でない」、「あまり必要でない」をあわせた結果は、「音楽を使う登下園・食事の援助方法」（21%）、「子どもの歌唱行動の発達過程」（9%）、「歌唱教材曲の具体的な指導法」（7%）、「子どもの音楽的発達の道筋」（7%）、「子どもの合奏等に使用する楽器の演奏方法」（6%）、「教材選択の具体的な方法」（5%）であった。以上の結果から、幼稚園教諭が現在必要と考えるものは「自らの音楽的技能」と「子どもへの具体的な指導」であり、音楽を使った日常生活の活動や「子どもの発達にかかわる知識」などは必要ないとする傾向が示された。

「幼稚園教諭が養成の段階で身につけておくべき音楽に関する技能・知識」について、「手遊びやその指導方法」（92%）、「ピアノの伴奏方法」（92%）、「19. 弾き歌いの技能」（88%）、「教師自身の音楽活動での動き、表情のあり方」（86%）（図表6-2）であり、「必要でない」「あまり必要でない」の回答が多かった項目は、「音楽を使う登下園・食事の援助方法」（20%）、

図表6-1. 幼稚園教諭として現在必要と考えられる音楽に関する技能・知識など

現在必要と考えられる音楽に関する技能・知識		(%)
必要 (N=135)	「教師自身の音楽活動での動きや表情のあり方」	58
	「子どもが歌うための援助方法」	55
	「手遊びやその指導法」	55
	「弾き歌いの技能」	53
	「ピアノの伴奏方法」	51
やや必要 (N=135)	「年齢別の音楽教材の知識」	52
	「音楽を使ったゲームの方法と援助のしかた」	51
	「場面に合ったピアノの即興演奏の方法」	48
	「教材選択の具体的な方法」	47
	「子どもの歌のレパートリーを増やす」	46
必要 + やや必要 (N=135)	「手遊びやその指導方法」	93
	「子どもが歌うための援助方法」	91
	「弾き歌いの技能」	91
	「ピアノの伴奏方法」	89
	「教師の音楽活動での動き、表情のあり方」	88
必要ではない + あまり必要でない (N=135)	「音楽を使う登下園・食事の援助方法」	21
	「子どもの歌唱行動の発達過程」	9
	「歌唱教材曲の具体的な指導法」	7
	「子どもの音楽的発達の道筋」	7
	「子どもの合奏等に使用する楽器の演奏方法」	6
	「教材選択の具体的な方法」	5

出所：奥村他「教員養成における領域「表現」の音楽側面の検討（1）」71-72頁本文より筆者作表。

図表 6-2. 幼稚園教諭が養成段階で身につけておくべき音楽技能・知識

養成段階で身につけておくべき音楽技能・知識		(%)
必要 (N=135)	「手遊びやその指導法」	59
	「教師の音楽活動での動き、表情のあり方」	51
	「弾き歌いの技能」	48
	「ピアノの伴奏方法」	47
やや必要 (N=135)	「音楽を使ったゲームの方法と援助のしかた」	55
	「幼児体操の方法と援助のしかた」	51
	「子どもの合奏などに使用する楽器の演奏の方法」	47
	「楽器を使った音楽活動の方法と援助のしかた」	46
	「教師自身の歌い方に関しての技能」	46
必要 + やや必要 (N=135)	「手遊びやその指導方法」	92
	「ピアノの伴奏方法」	92
	「弾き歌いの技能」	88
	「教師自身の音楽活動での動き、表情のあり方」	86
必要でない + あまり 必要でない	「音楽を使う登下園・食事の援助方法」	20
	「歌唱教材曲の具体的な指導法」	10
	「教材選択の具体的な方法」	9
	「子どもの音楽的発達の通航」	9
	「子どもの歌唱行動の発達過程」	8

出所：奥村他「教員養成における領域「表現」の音楽側面の検討（1）」73-74頁本文より筆者作表

「歌唱教材曲の具体的な指導法」（10%）、「教材選択の具体的な方法」（9%）、「子どもの音楽的発達の道筋」（9%）、「子どもの歌唱行動の発達過程」（8%）であった（図表 6-2）。幼稚園教諭はピアノや歌の技能、保育者自身の音楽面での表現力が必要と考え、就職前に養成校での育成を期待している。一方、子どもの発達に関する知識や教材についての知識・指導方法は必要としない回答が多かった。これは各園や担任に委ねられている実情、到達度への基準などが設けられていないことによると考えられた。

これらのことから、幼稚園教諭が養成校において学習すべきと考えている内容は、「教師の音楽的技能」と「子どもへの援助の方法」で、現在の教師が必要と考える内容とほぼ同様の傾向であった。しかし、子どもの発達にかかわる「知識」や音楽を使った日常生活の活動の援助方法については必ずしも必要ではないと考えている。

7

5）身体表現実技講習に参加した幼稚園教諭対象調査⁽¹³⁾

表現あそびおよび身体表現あそびの実践状況と内容に関する調査（幼稚園教諭（女性37名））によると、幼稚園教育要領の領域「表現」8項目の実践状況（「5. よくする」、「4. する」、「3. たまにする」、「2. あまりしない」、「1. しない」で数値化し、各群の平均値を算出）は、保育歴（「新人期」は保育歴を0～3年まで（13名）、「中堅期」4～9年（15名）、

「ベテラン期」10年以上（9名）⁽¹⁴⁾と関連していた（図表7）。

実施度が高い表現遊びは新人群では「音楽あそび」（4.38）、「造形あそび」（4.23）、中堅群は「造形あそび」（4.2）、「音楽あそび」（4.13）、「いろいろな素材あそび」（4.07）、ベテラン群では「造形あそび」（4.44）、「感動したことを伝え合う」（4.22）、「いろいろな素材あそび」（4.22）であり、「造形あそび」、「音楽あそび」、「いろいろな素材あそび」の実施度が高い結果であった。

実施度が低い表現遊びは、新人群で「イメージの表現あそび、演じて遊ぶ」（2.92）、中堅群は「感動したことを伝え合う」（3.47）、ベテラン群は「音、色、形、手触り、動き」（3.89）であった。

新人群と中堅群・ベテラン群と差が大きかったのは、「イメージの表現あそび、演じてあそび」内容であり、新人群・中堅群ともにベテラン群と差が大きいのは、「感動したことの伝え合い」である。「感動したことの伝え合い」について、ベテラン群は「一日の発表を最後にする」、「帰りの会などで、伝え合う」と、毎日必ず一日を振り返る時間や場を設け、驚きや感動したことを子どもたちと共有していた。

3. 学生が必要と考える表現能力と大学で習得したい内容

先行研究では現場の保育者や養成校教員が必要と考える表現活動に関する能力や技術などについて議論されてきた。しかし、養成校学生が現場で実習を経験して実際に必要と感じる表現活動に関する能力や知識について明らかにされてきたとはいえない。本稿では、2017年10月に筆者の教職実践演習に出席した学生に調査の趣旨を説明し、2017年6月の教育実習について振り返ってもらい、責任実習の内容と表現活動に関する調査を行った。調査票は智原江美他「幼稚園・保育所における表現領域の活動に対応した保育者養成教育のあり方」で使用されたアンケート調査を参考に、「責任実習を行った結果」、「表現活動指導の

図表7. 表現遊びの実施度（n = 37）

内容	新人	中堅	ベテラン	全体
造形遊び	4.23	4.20	4.44	4.29
音楽遊び	4.38	4.13	4.11	4.21
いろいろな素材遊び	3.54	4.07	4.22	3.94
感じたことの表現	3.54	3.73	4.00	3.76
感動したことを伝え合う	3.42	3.47	4.22	3.70
音、色、形、手触り、動き	3.46	3.62	3.89	3.66
イメージの表現遊び、演じて遊ぶ	2.92	3.79	4.11	3.61
美しいもの心動かす出来事	3.08	3.67	4.00	3.58
平均値	2.92	3.83	4.12	3.84

出所：多胡綾花「幼稚園における身体表現遊びの実践内容について」『湖北紀要』33号、2012年、23頁より転載。一部筆者加筆。

面白さ・困難さ」、「表現活動を実施するにあたって養成校で習得しておきたかったこと」などについて回答してもらった。調査を実施した時期は就職活動など様々な理由で欠席する学生が多く、出席者全員から調査票が回収できなかったこともあり、有効回収票は8票であった。調査結果を本稿に使用する許可は調査票回収時に得た。

責任実習では年齢や季節を考慮した製作活動をする事が多く、回答者7名も製作活動を行い、1名はフルーツバスケットといったゲームであった。

表現活動を行うときに重点をおいたことは「子どもが楽しくできているか」（1名）、「子どもが楽しく主体的に保育を行えること」（1名）、「けがのないように気をつけた」（1名）、「子どもが簡単に行えるように動きを考えた」（1名）など子どもが主体となって行動できるように考えていた。

表現活動指導の面白さについては「子どもの表現したいものを表現できる」（1名）、「一緒に感性を豊かにする」（1名）、「人それぞれ違う表現がある」（1名）、「（年齢別）導入や内容によって子どもの反応が違うこと」（1名）、「子どもが想像をこえてくる」（1名）、「たくさんの道具の使い方」（1名）などをあげていた。

表現活動指導の困難さについては「子どもの表現したいものを大人が壊してしまうことがある」（1名）、「自分で展開するので、考えが難しい」（1名）、「子どもたちが予想外のことをする可能性がある」（1名）、「伝え方が難しい。正解がないところ」（1名）、「どう言えば伝わるか」（1名）、「色々な表現法を知ること」（1名）などがあげられた。

責任実習を振り返って、大学で学んだ方がよい内容（複数回答）は「指導法」（4名）、「感性」（3名）、「展開するための技術」（2名）、「技能」（2名）、「活用能力」（1名）、「統合能力」（1名）であった。

大学で経験・習得しておくといふ事柄は「人前で話す経験」（1名）、「劇を観ること」（1名）、「考える力」（1名）、「みんなの前で指導する経験」（1名）、「子どもたちへの伝え方、まとめ方」（1名）などであった。

少数の回答結果であり、この結果を一般化することはできないが、学生たちは大学入学1年半後に子どもたちの前で責任実習を行い、表現活動指導の困難さに直面しながら、様々な表現法があること、子どもに伝えることの難しさなどを学んでいた。大学で習得しておくべき事柄として、人前で話す経験や皆の前で指導する経験があげられていた。大学の授業では時間の制約があるため個人発表に使用できる時間は限られ、グループでの発表にも準備に時間がかかり、グループごとの発表も時間が限られるため、責任実習で体験した事柄を解決することの難しさを改めて考えさせられる結果であった。また、大学で学んだ方がよい内容に「指導法」や「感性」などがあげられていたことから、表現活動に関する授業では指導法、感性について取り組む必要がある。

学生の責任実習体験から表現活動を実践する際、保育者は子ども自らの主体的な取り組みや自由な発想を受けとめながら、「楽しむ」ことに重点を置いていた。学生が保育者として必要と考える技能・知識において、音楽表現にかかわるものに「身体表現を引き出すピアノ演奏をする」、造形表現にかかわるものに「自然やものの色や形、感触、イメージ等に親し

む経験」、「子どもの心身の発達と造形技能の発達についての知識」、「素材特性に関する知識や理解」、「表現技法についての知識や技術」、身体表現にかかわるものに「体力」、「子どもの身体表現にかかわる身体能力の発達についての知識」などがあげられ、実習で体験した切実な内容が示されていたとも思われる（図表8）。

どの内容も大学の授業内で学んでいるはずであり、「考える力」は大学入学前から身につけておくべき内容であるが、多くの子どもを前にこれまでに大学で学んできた内容・能力を発揮することが難しいことも考えられる。今後はより多くの学生に同様の調査を行い、表現活動に必要な授業内容について考えていきたい。

図表8. 表現活動を実施する際重要と考えられる保育者の知識・技能（n＝8）

保育者の知識・技能		(人)
音楽表現にかかわるもの	幼児歌曲を知っている	6
	音程・発生をよく歌う	3
	楽譜を読む	2
	弾き歌いをする	2
	幼児歌曲にコード伴奏をつける	—
	身体表現を引き出すピアノ演奏をする	5
	子どもの音楽的発達についての知識	4
	音楽表現活動の指導法	4
造形表現にかかわるもの	自然やものの色や形、感触、イメージ等に親しむ経験	6
	素材特性に関する知識や理解	3
	表現技法についての知識や技術	3
	用具の使用方法	1
	素材や技法を組み合わせる力	—
	子どもの心身の発達と造形技能の発達についての知識	3
	造形表現活動のための環境構成	—
	造形表現活動の指導法	1
身体表現にかかわるもの	子どもの経験や表現活動と造形表現を結びつける遊びの展開	1
	体力	5
	運動を行う身体能力（走能力、跳躍力など）	1
	スポーツなどの運動経験（球技、陸上競技など）	1
	身体活動を伴った遊びの経験（鬼ごっこ、わらべ歌遊びなど）	2
	ダンス（フォークダンス、バレエなど）の経験	—
	創作ダンスの経験	—
	リズム感	2
	身体表現の指導法	2
	子どもの身体表現にかかわる身体能力（スキップ、バランス感覚など）の発達についての知識	3

4. まとめ

先行研究の調査結果から、多様な表現活動が保育現場で行われ、保育者に求められる知識・技能として、音楽表現では弾き歌い、造形表現では自然・色・形・感触・イメージ等に親しむ体験、身体表現では身体活動を伴った遊びの体験があげられていた⁽¹⁵⁾。また、保育現場での造形指導の現状として2つの極端な例があり、1つは、活動の場と材料を与えるだけで保育者による基本的な指導が全くされず、子どもにまかせきりの例、もう1つは保育者によって表現の到達目標が設定され、そこに向かう方法も過程もあらかじめ定められた造形指導も指摘された。実際は、保育全般を総合的にとらえて、両者の考えを併せ持ち、揺れ動きながら保育が行われている⁽¹⁶⁾。

表現を実践する際の課題について、直接子どもの音楽表現にかかわっている保育者が直面し、必要としているものに音楽の場合は「ピアノ等を使った演奏や援助の方法」と「子どもと歌って遊ぶ方法」などの保育者自身に内在する音楽的指導力であった⁽¹⁷⁾。身体表現の場合は「自身のレパートリーが少ないので、指導が偏る」、「自分の知識が少なく、なかなか挑戦しようという意欲が持てない」など、自分の保育にマンネリ化や行き詰まりを感じていたことと、「自分を表現することが苦手」にしていた保育者が多かった⁽¹⁸⁾。

一方、子どもへの対応について、音楽については「どなり声で歌ってしまう子に対する指導方法」や「子どもの発声のしかたの指導方法」、「上手に歌えない子どもへの指導方法」、「リズムがとれない子どもへの指導法」、「メロディーがうまく歌えない子どもの指導方法」であり⁽¹⁹⁾、身体表現あそびは「積極的に参加できない子への対応」、「身体表現あそびを進んでやろうとしない子どもへの対応や働きかけ」などであった。また、身体表現を行う場合は、音楽や造形のように保育室で座って行うことはできないため、全身を動かすスペースが必要であるなど空間的・時間的制約が身体表現あそびの実践を妨げていた⁽²⁰⁾。

ピアノや歌の技能は養成校での育成が求められているだけではなく、音楽以外の表現遊びへの幅を広げることも求められていた。また、取り組みやすい身体表現あそびの題材に、音楽やリズムに合わせて動く「リトミック」、全身を動かす「体操」、振付が決まっていることが多い「ダンス」があるという⁽²¹⁾。子どもは様々な動きを経験し、動きを発見できる。「保育室ですぐにできる」、「ちょっとした時間にできる」身体表現あそびを実践し、自分の「イメージ」を「動き」に変えていく面白さ、新しい「動き」を「創造」する楽しさを味わえるように身体表現あそびの実践内容を考える必要がある⁽²²⁾。

子どもの歌声への指導も養成校での指導に求められていた。子どもの歌声について、実際の保育室で子どもと音楽で遊び、歌声でかかわるにはどのような声をモデルとするかを選択する力を実践において育てる必要があるという。その必要性から、養成校入学後の早い時期から子どもの姿を観察・理解し、実際の教師の歌声にふれる体験が求められていた⁽²³⁾。実際の保育場面では、保育者が持つ発達についての知識や、子ども観に依存した保育方法に委ねられる現状がある⁽²⁴⁾。保育者は子どもの内面や姿が見えた時に表現活動に面白さを感じ、それゆえに子どもの発達に則した指導力の重要性を指摘し、保育者に求められる表現内容に

関する知識・技能・総合的実践力には、保育者の資質として豊かな感性が必要である。

指導によって保育者の願いがかなえられ、援助によって子どもの思いも十分に発揮される表現活動を目指すために、保育者は資質を高め、高度な専門性を身につけるようにしなければならない⁽²⁵⁾。保育者養成校学生の生育環境や経験の違いにより感性・創造性には大きな差があることも指摘されてきた。創造的な活動に主体的に取り組めない学生が増加する傾向にあり、感性豊かな保育者を育てるための工夫が必要であると指摘されてきた。「授業の進行をわかりやすく」、「リラックスできる雰囲気作り」、「グループワーク相互発表」を含め、養成校学生は自分たちの表現活動を子どもの前で见せる経験を行うことで、学生自身の達成感を得ることができる。さらに子どもの様々な表現をどのように受け止めるかも貴重な経験である⁽²⁶⁾。学生の回答から得られた表現活動に必要な内容などは経験が浅いために、経験を積んだ保育者とは異なる内容もあるものの、大学入学一年半の間に表現活動の授業内で身につけておくべきこと、学びたい内容であることを改めて考えさせられることでもあった。今後は表現活動に関する授業の情報交換を教員相互に行いながら、保育現場で必要とされる授業を考察していく必要がある。

注

- (1) 志村洋子「幼児とともに育つ—幼児の音楽的発達を求めて：保育者養成の場で音楽教育に何が必要か」『日本保育学科大会研究論文集』56、2004年、S22頁。
- (2) 奥村正子・山根直人・志村洋子「教員養成における領域「表現」の音楽側面の検討（1）：幼稚園及び小学校の教師の意識比較」『埼玉大学紀要・教育学部』56-1、2007年、69頁。
- (3) 石川眞佐江「幼稚園教育要領における音楽活動の位置付けの歴史的変遷：領域〈音楽リズム〉から領域〈表現〉への転換を中心に」『静岡大学教育学部研究報告 教科教育学篇』44、2012年、97-109頁。
- (4) 保育者養成校における「保育内容表現」開講の現状を把握するために、「全国保育養成協議会」の会員校のうち平成22年5月現在、4年制大学で関東甲信越地方にある61校を対象に、インターネット上でカリキュラムおよびシラバス検索が行われた（安村清美、中原篤徳、斉木美紀子「総合的な「表現」への取り組み（1）保育者養成校における「保育内容表現」の現状と課題」『田園調布学園大学紀要』（5）、2010年、201-216頁）。
- (5) 音楽表現テキスト執筆教育所属の短期大学32校の養成課程とシラバスを平成26年9-10月インターネット上のホームページから検索・閲覧・抽出（福西朋子「領域「表現」と保育者養成課程における音楽表現の指導・援助方法科目について」『高田短期大学紀要』33、2015年、33-40頁）。
- (6) 奥村正子・山根直人・志村洋子、前掲論文、79頁。
- (7) 佐藤弘毅『文部科学省平成21-22年度先導的大学改革推進委託事業 短期大学における今後の役割・機能に関する調査研究』成果報告書 2010年、81-83頁。
- (8) 松下明生「保育者に必要な造形能力についての研究—アンケートから見る保育者が必要と考える造形能力についての検証」『名古屋柳城短期大学研究紀要』2016年、93-102頁。
- (9) 平成26年10月に、京都市内及び京都府下南部の幼稚園（国公立50園・私立50園）・保育所（私立50園）計200園を対象に、アンケート調査を郵送方式で実施し、5歳児クラスの担任教諭

- または保育士が回答（回答は公立50園、（智原江美、鍋島恵美、和田幸子、下口美帆、田中慈子「幼稚園・保育所における表現領域の活動に対応した保育者養成教育のあり方：京都府南部の幼稚園・保育所へのアンケート調査からの検討」『京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部研究紀要』53、2015年、119-134頁））。
- (10) 全国200校の幼稚園教諭・保育士養成課程を有する大学・短期大学・専門学校に平成28年2月に「保育者養成校における『表現』領域の授業にかかわる調査」を郵送し、大学13校、短期大学37校、専門学校5校、計55校からの回答（回収率は27.5%、（校種別では大学15.7%、短期大学38.1%、専門学校25.0%）回答者の専門領域の内訳は、音楽表現24名、造形表現17名、身体表現13名、言語表現1名、その他9名。智原江美、鍋島恵美、和田幸子、田中慈子、「アンケート調査からみた保育者養成校における総合的な表現活動に関する授業の実施状況」『京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部研究紀要』54、2016年、197-208頁。
- (11) 奥村正子、山根直人、志村洋子、前掲論文、69-82頁。
- (12) 質問紙は各園及び研修会などの会場において、調査の目的について調査者らが説明し、質問紙を配布。小学校教諭も、研修会会場で調査者らが説明し、質問紙を配布。調査期間は2005年12月から2006年8月。
- (13) 2011年8月（神奈川県）に身体表現の実技講習に参加した現任幼稚園教諭46名（有効回答37名（97.8%））に質問紙調査が行われた（多胡彩花『『身体表現あそび』の実践状況と実践上の問題点について』『湘北紀要』（34）、2013年、21-36頁）。
- (14) 多胡彩花、前掲論文、22頁。
- (15) 智原江美、鍋島恵美、和田幸子、下口美帆、田中慈子、前掲論文、129頁。
- (16) 村田夕紀「幼児の造形指導の試み―豊かな表現を引き出すために―」『四天王寺大学紀要』第50号、2010年、229頁。
- (17) 奥村正子、山根直人、志村洋子、前掲論文、79頁。
- (18) 多胡彩花、前掲論文、27-29頁。
- (19) 奥村正子、山根直人、志村洋子、前掲論文、77頁。
- (20) 多胡彩花、前掲論文、29-33頁。
- (21) 多胡彩花、前掲論文、30頁。
- (22) 多胡彩花、前掲論文、34頁。
- (23) 奥村正子、山根直人、志村洋子、前掲論文、80-81頁。
- (24) 奥村正子、山根直人、志村洋子、前掲論文、80頁。
- (25) 村田夕紀「幼児の造形指導の試み―豊かな表現を引き出すために―」『四天王寺大学紀要』第50号、2010年、236頁。
- (26) 智原江美、鍋島恵美、和田幸子、田中慈子、前掲論文、203頁。